

ステップアップ

北 斗 市 立 大 野 中 学 校
研 究 部
第 5 号
2019.11.1

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり

～生徒の学習の成果等を的確に捉える学習評価の充実～」

【めあて】ミニ校内研をふりかえり、自分の授業に取り入れたいことを見つける。

10月校内研修内容

□ミニ校内研の振り返り 授業者 明田先生・阿部真琴先生
□ICTを活用した授業改善について 平元・阿部

	課題について	ルーブリックについて	振り返りについて
A	課題を単元の導入時に示すことで、生徒が課題解決の見通しをもったり、生徒が自らの課題を立てることに役立っている。	ルーブリックは、生徒が学習の見通しをもったり、 <u>生徒が自分の学習状況を把握し、学習の進め方を調整する</u> など、生徒自身も活用できるものになっている。	生徒が自分の学習状況を把握し、 <u>学習の進め方について調整・試行錯誤ができるような場面</u> を授業の中に作っている。
B	課題を単元の導入時に示すことで、生徒は課題解決のための <u>必要感</u> をもって知識や技術習得の授業に取り組んでいる。	モデリングや作品提示を通して、 <u>評価の具体的な姿</u> が生徒に伝わっている。 <u>(教師と生徒が共有している状態)</u>	文型の提示や字数・用語の指定など思考の枠組みを与えることで、 <u>何をどのように、どのくらい書いたらよいか</u> を教師と生徒が共有している。
C	毎時間単発の課題が示され、単元を通した学びのつながりや単元のゴールを生徒が意識できていない。	単元で身に付けることや学ぶこと(単元のゴール)について、生徒が見通しをもった状態で毎時間の授業にと入り組めていない。	生徒が学んだことを振り返ったり、確かめたりする場面が授業の中にある。具体的な指示をせずに書かせてしまい、思考に深まりがない。

《ミニ校内研のふりかえり》

【2年B組 理科】

(授業者より)

自己評価表などにルーブリックを示していくことで、生徒に意欲的な活動が期待できると考えられる。また今回、他の単元にも活用できるように作ったルーブリックを今後も授業に活用したい。

○生徒が授業にスムーズに入れるように静電気について下敷きで髪の毛が立つ・袋がくっつくなど身の回りで起きる現象をもとに導入を行っていた。

○複数の実験を通して生徒たちが本当に楽しんで学んでいた。

○授業の最後に師範実験を取り入れ、最後まで生徒が飽きることはない授業展開だったと感じる。

★実験の際、グループごとに役割分担を決めた方が良かった。ずっと同じ実験をしている生徒。ただ見ている生徒など、実験に参加している生徒と見ている生徒に差があった。

★生徒たちが静電気の性質についての予想を記入していなかった。生徒たちは、「静電気はバチッとする」などの表現はできるが、「放電する」など専門的な表現・単語を予想の段階で使用する事が難しい。

【1年C組 美術科】

(授業者より)

課題毎に使用している学習予定表及び自己評価表にルーブリックをつけた資料を使用することで、課題への取り組み方が明確になると感じた。

○席の近くで生徒同士が意見交換を行うなど、積極的に授業に参加する様子が見られた。

○生徒達が自己評価表によって振り返りや、次回の目標を立てることができていた。

★グループワークの際に1年生の生徒たちでは、話し合いに慣れていない様子が見られたので、型をつくと良い。

★モデリングにICTの活用や、実物投影機を使うと更に良かった。

校長先生から

「何をどのように書くのか」「何のために話し合うのか」を生徒が把握できるように指示することが学びを深めることにつながる。ルーブリックによって授業のあいまいな部分に気づくことができる。

校内授業研究（前期）のまとめ

10月までの授業研究から

（1）ルーブリックや評価についての説明のタイミング

単元や本時の導入時に示すことで、生徒が自分の課題を設定したり、学習の見通しをもったりすることができる。

→例えば、国語科の授業では、本時の導入時にルーブリックを見ながら、自分の発表の課題を設定する時間が設けられていた。また、英語科の授業では、単元の導入時に課題を示すことで、目的意識を持って毎時間の知識習得の授業に臨めるような指導計画が組まれていた。

（2）ゴール（目指す姿）を生徒と教師が共有するために

単元や本時の導入時に、課題やルーブリックを示すことで、ゴール（目指す姿）の方向を示すことができる。ただし、毎時間、詳細なルーブリックを作ることは難しいので、汎用性のあるルーブリックをつくり、師範や作品提示、条件の付加などによって、本時におけるゴールを具体化する方法が効率的だと感じる。また、単元や年間など長期的なスパンでルーブリックを活用しながら指導を繰り返し、それを蓄積することで技能や表現を高めたり、思考・判断を深めたりしていくことにつながると考える。

→例えば、国語科の授業では、導入時にスピーチ動画（評価の異なるもの）を視聴し、A評価・B評価の違いを具体的に捉えさせた。また、英語科では、AETと教師による師範を行った。また、両教科とも「3文で」「～を使って」など本時における具体的な基準をルーブリックに合わせて説明することで、内容的なゴールを生徒と共有できていた。そのため、生徒もルーブリックを使って、自己評価や他者評価ができていた。さらに、理科では、実験操作や予想・考察などの観点でルーブリックを作り、年間通して使用できるものにしていく。

（3）即時評価の充実

即時評価は、学習意欲の喚起や、1単位時間の授業の中で生徒が達成度を自覚し、向上を目指すために有効である。

→例えば、机間指導の際に、ノートやプリントに線引きや○付けをしたり、個別に声を掛けたりする姿は、教科問わず見られた。また、英語科では、生徒のスピーチ発表が終わった後、教師だけでなく生徒も「Good job!」などの声かけをしていた。これは、発表の前に、聞き手の心構えとともにどのような評価の言葉があるかを事前に指導していたためである。

（4）モデリング・活動指示の具体化

これまでの授業研では、「考察を書く」「話し合いをする」などの活動は示されているが、具体的な指示がないために、生徒が「どのように、どの程度書いたらよいのか」「何のために話し合うのか、どのような状態になったら話し合いが終わるのか」を把握できておらず、学びが深まらないまま進んでしまう場面が見られた。ゴール（目指す姿）をより具体的に生徒に把握させることは、対話的な学びの動機付けや深い学びへとつながると考えるが、これまでの授業研では指示が曖昧な授業も見られ、改善が必要である。

→例えば、「意見が同じ人と交流して、根拠を5つ以上あげよう」「実験から一つ選んで例示し、○○というキーワードを使って考察の型に従い5文で書いてみよう」など具体的に指示し、活動の枠組みを明確にする。また、まとめの際には、教師の解を示し、生徒が自分の表現と比較し、適否を確かめられるようにする。

課題に対する教師の解を授業の前に準備していないまま授業を進めると、生徒を惑わせたり、焦点がぼやけたりすることにつながる。

（5）既習事項・知識や技能のレディネスの把握

十分な思考・表現をするためには、本時の課題を解決するために必要な知識や技能が活用できる状態になっていることが前提となる。既習事項の復習や課題解決に向けて目的意識をもって知識や技能の習得に臨ませる必要がある。また、生徒が自ら調べたり振り返ったりできるように、学び方の指導も大切である。